



草くさ 曉あけ 風かぜ

雜あそび

鶴つる 松まつ 雲くも

猿さる 竹たけ 晴はれ

和漢朗詠集卷下

信濃仲作

高橋小太郎

為

一筆

各一筆

閑居 幼孫 親王 判史 姘女

眺望 庚申 丞相 詠史 姘女

餞別 帝王 將軍 王昭君 老人

山寺 山家 右京 山水 紫尾

佛事 田家 右官 水 文詞

僧 隣家 仙家 禁中 酒

交友 懷舊 述懷
 參贊 祝 慈
 無常 白

雜

風

春風暗窗庭前樹影
 入松易乱欽恸明香
 夕歸夜遊子
 漢主年峽下徐君
 指扇
 無

班姬裁扇在移为子色車不様を

わさうせのるるくうけくもこつあうか

かのかの紫あうかきけはしりてま

のくしありあけし月の月けふ

雲

竹相浦雲凝致想之風

と夷其月元吹蕭也

上遠雲携幻客の程寒園夜旅人夏

在日望書心疾有厨身月平正閑

漢皓西美中朝望徹孤客之月

陶年諱越之書眼恨又湖之狂

将傷秀通非裁石空偷法法量程和

道帝結款味也准難起失留連

中務

信明

張讀

元慎

江以言

都佳年

よそりよこかみやみまじり
そりまのよかみまじり
讀人不知

晴

耀消門外暮山近露重雲
藤惟成

紫雲嶺風味書收百重外

露布氣象似冷月如雲字及餘

雲消碧落天瀟灑風動
轉快敲

雙鶴出草投舞落松
水石消

海峯鶴舞日見飲深
綠林病

かきんんれみり乃
あかりたふふあま
江以言

晚

佳入畫餅於晨粧
秋入暈動子

於約お残月函谷
鶴鳴

我幻南之石一斤西傾月
逐逐逐獨約子接店於痛
泣如城百我之師胡箭東歌
教糖金屋之中青娥西會
新富瓊卷之上紅獨之輝
又富海初明之點定輝欲滅時

ね

伴之妻松常在下更其一事為伴
昔也者言猶在也海無梅鶴心
子文凌音在吟愁座之海音
步靴風雅破音由之射

九夏三伏の暑月竹倉瑞午風

言冬去雪の寒朝松氣若子の徳

十桑相と落つ子年也書平源順

合西院松天も書院材材業次宗元江相公

おまははかからるりわみらるるうくね

これらくもひかのまらりりし書宗千

おまははかからるりわみらるるうくね
これらくもひかのまらりりし書宗千

竹

煙葉の乾後春風竹葉飛散

正鶴瑞揚金月子飲着処鳥栖煙立華公標

晋騎共森字子飲裁梅子若竹葉

唐字子若字白樂天也己為晉友

并筆末棟の園後磐根終點付家
よふられいこののそけいれけの
草

少頃雨深斑草水西園遊憩に

西施顔色今付古衣春風日暮記

飄草上床の草流流の流と葵

菅深標雨湿原宮と極

草色雷晴初布霞鳥を露照影

華山有馬蹄狂露傳野雲河漸滋

かのとらんあよりらとれとあふあり
わりのつもありこまよさんと海くさふん
れがあすきののり乃いたあおあふ
こまよとさめとらりあ
屋うんともくさのしあじりとり野
そくともりあまらとらり

忠見

重之

保能

後江相公

直轄

元稹

讀人不知

鶴

媼少人而端言位鶴有業行烈皇貴

利以覆邦家孝重能宰后

同李陵之入胡但見異類皇甫曾

似屈辱之立楚家人皆解

空来枕上子直鶴落常伴突家

清教教者松下鶴空先一踏竹君能

菱舞庭前花落处教空坐月明時都長香

鶴歸舊道平人念感詞の徳誌

平新儀陶安公之駕在眼

能能性疎志之乳老鶴心閑後之眠

川溪在駕孤枕及和園漫入六弦琴順

わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
赤人
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
伊勢
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
わりのこころよみがみらくさひつゝいとるゝ
清正

揺其霜滿一聲雲鶴暖天謝觀

已渡秋深六夜と雲猿月

江邊已渡初成字猿と雲陽塔已暖白

三秋後は雲御海一葉舟中載病児

胡鴈一聲秋夜高音く夢久已一置澄明

猿二川晚雷江行人と雲紀綱言

人煙一種林村僻猿二川雲晚涼

暖渡難涼猿二川雲林在為先江相公

管靜沈園山鳥是初老斜陽更樣好又九

月つきののららふまららあらうそああひひささ乃乃

管絃付舞妓

野植

一聲いっせい鳳ほう後ご秋あき鶴つる暮くれ不ふ空くう之の雲うみ教しやく
拍しやく霞げい出い紅こう曉あけぼの之の維い山さん之の月つき

第一だいいち身み二に絃げん索さく之の秋あき風かぜ拂ふき林はやし疎そ韻いん落らく

第一だいいち身み四し絃げん之の書かき鶴つる懷おもひ子こ鷲じゆ中ちゆう鳴なり

舞まひ又また絃げん之の掃はき下した絃げん球きゆう凍こお圓えん庭てい流りゆう之の石いし

後ご絃げん之の自みづか國くに皇みかど之の南みなみ海うみ流りゆう之の人ひと知し

舞まひ合あひ下した裁きり衣い婦ふ儀ぎ芳よし同どう心こころ一いつ片ぺん毛もう

雅みやび綺き之の為ため重おも衣い垢あか云いひ書かき之の枝えだ婦ふ

管くだ絃げん之の在あ長なが曲まが怒いか不ふ圓えん之の人ひと

為ため梅うめ中ちゆう舊ふる高たか厩うま以もつ言こと杉すぎ柳やなぎ之の新あらた梅うめ

相あひ如ごと者もの批ひ文ぶん若ごと侍しやく之の役やく層しやう平へい子こ細こ社しゃ

ここのの者ものよよららりりああららううめめけけ心こころ

齊宮女御
惟高親王

文詞付是文

陸王衛

沈詢拂悅者游魚衛均出深淵底
浮深連鈿如軌馬盟安徵法重之威
坐互三千軸之人至玉珍龍門原

元積

上上埋骨且不埋名

言借巧偷鶴鶴竟交季子詩風元

錦世院用刑每教國殊妙馬壯雄整

昨日山中之本力取諾己今日

篤茂

庭花之在詞熱於人

順

王朗入紫之強據徐屠事之四子

淹一阿之友集之別駕之文

陳孔璋祠之金宿馬相賊之凌雲

贈寄新恩泥封在報麟之集世知

いつたり乃あまう世ありはいつたり

讀人不知

新考海國通志 卷之四 鳥類考 中

全業德

鳥類考 中 鳳凰 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇 鳳皇

酒乞下家村く正傳似長美
先年江福の守御乾季伝風
色濃運徳北の出玩播吾の便長
王勅の事宗浪絶卷原山言を忍忍
わりしものくらそとれうろ負ふ
りけもそひておぬとれたま

山

代室廻江美海原色を忍忍年

後地室来室室室都山房を山人

夜寝眠を背若睡能た有後寝

紙扇抱来ま室室室室室室室

名新院與林頂老群海書即谷心室

かのみしそやまはみうこもあうり計を
あさひゆりあうこもあうり計を
く色れわらあうこもあうり計を
見まこちはまうのこあうり計を
い色はもれあうり計を

賀蘭屋

能宣

保胤

後中書主

福相

都在中

後中書主

以言

赤坂

表盛

山水

泰山不讓古壤故能成其高

海不賦細流故能成其深

巴嶽一可倚舟柱以自強

胡馬忽野失路也黃砂磧

嶺自著山青嶺溪天秋水白

魚舟次第定樓浪浮流若

山從風江以葉以能來往

草木枝疎春風搖山祇

勢懸接戲杖多字河伯之

轉康獨注樓花樂如春

雲每舟之泊煙波推

山溪山何之削成青

水維象深若碧潭之

江發源明

山部遠樹のえん用の海の原の村の日の時の時
山の來の向の省の斜の陽の裏の水の道の流の子の水の間の間
神のさのしのひの乃のとのしのりのれのやのまのつのるのるの奔の
後江相公

水 付漁父

島城のとの牧馬の於の平沙の沙のとの
河香の松ののの抽のんの名の沙の暖の香の集の道の存の氏の
河香松の抽ん名沙暖香集道存氏

將軍の善の子の中の衣の長の梅の由の蒙の切の
將軍善子中衣長梅由蒙切

水の身の海の軍の兜の衣の月の華の能の抄の入の女の内の美の
水身海軍兜衣月華能抄入女内美

燕の意の抄の的の美の清の龍の胆の身の付の來の流の洋の羅の
燕意抄的美清龍胆身付來流洋羅

軍の者の屬の於の維の心の名の居の角のとの牛のとの也の
軍者屬於維心名居角と牛と也

林の名の日の人のおのいのとの來の聲の院の新の家の如の
林名日人おいと來聲院新家如

垂の釣の去のふの乃の魚の暗の思の浮の懸のまのとの
垂釣去ふ乃魚暗思浮懸まと

梅の折の之の唯の中の存の在の鼓の振の者の時の時
梅折之唯中存在鼓振者時

沙汰判下 鶴野 又 水巻 撰 去 存 及 時
 日 物 以 年 終 爲 書 風 俗 爲 幸 多 快 也
 好思
 伊勢
 平佐將

禁中

園池 是 面 新 林 竹 葉 繁 茂 以 爲 勝 景 也
 休 存 寄 寓 處 爲 甚 妙 仙 侶 數 欲 結 園 居

三子 仙 人 種 姓 合 元 殿 角 後 孫 也

鶴 人 曉 宿 在 在 乃 主 之 眠 覺

待 和 吟 寄 敬 晴 之 種

釣 作 日 爲 冠 之 後 新 之 山 居 後 孫 也

見 之 也 亦 有 其 妙 也 夫 亦 有 其 妙 也
 中務
 其 妙 也 亦 有 其 妙 也 夫 亦 有 其 妙 也
 其 妙 也 亦 有 其 妙 也 夫 亦 有 其 妙 也
 其 妙 也 亦 有 其 妙 也 夫 亦 有 其 妙 也

古京

古京

蘇芳の末に蘇麻鹿兒の末に蘇芳の末に蘇
 芳の末に蘇麻鹿兒の末に蘇芳の末に蘇
 芳の末に蘇麻鹿兒の末に蘇芳の末に蘇
 芳の末に蘇麻鹿兒の末に蘇芳の末に蘇
 芳の末に蘇麻鹿兒の末に蘇芳の末に蘇

有る言 付る言

法毒古柳 徳祝まを 春色抜

為老傭 壞字 蘇有 林有

甚似 滑石 粒砂 徹着 以 珠 廣 獨

吳成 考 考 考 考 考 考 考 考 考

墨 美 不 老 考 考 考 考 考 考 考

老 鶴 遠 來 仙 洞 考 考 考 考 考 考

孤 花 悲 露 考 考 考 考 考 考 考

慈 靜 念 海 林 葉 池 涼 洞 考 考 考

何 咲 道 以 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

月の 考 考 考 考 考 考 考 考

いあし 庵はらるるやいよあけ 見えけせ
一葉掃歌

仙家 付空 隠倫

重中 天地乾坤外 万象皆自是
藥爐有火丹竈伏雲 確無少人水自春
山底採藥雲ふ 狀洞中栽樹鶴先知
三重雲浮古方室之 宿多浪み成
家 詩十二 樓之 梅 柳 天

青大 吹花 花 流 紅 桃 浦
鶯 風 梅 葉 香 桂 林
深 入 仙 家 難 為 半 日 客 恐
歸 舊 里 終 在 古 世 吟
丹 竈 乃 成 仙 竈 山 中 家 月 在 佳
石 床 笛 洞 嵐 之 松 葉 抱 林 多 狹 步
桃 李 花 香 滿 庭 春 草 綠 如 畫 遠 峯 誰 掃

高岩一丈雪
高山有佳人
君山有佳人
道愛和深
わさくわとや
いそりられ
素性

山家

是宅寺清
松花香
松花香
松花香

葉着花
葉着花
葉着花
葉着花

淡父
淡父
淡父
淡父

王尚書
王尚書
王尚書
王尚書

紅衣
紅衣
紅衣
紅衣

幽垣
幽垣
幽垣
幽垣

南望
南望
南望
南望

野
野
野
野

野
野
野
野

F

若三品

杜甫鶴

若三品

後江相

紀綱

の 妙紫 鷲白 鷲道 鷲お朱 推こあ

山路 目嘗 満身 老推 秋牧 笛之 聲

洞戸 鳥蹄 老眼 去竹 松霧 鳥

花名 竟友 字定 鏡圓 毛梅 子鶴 上

晴は 青山 陰觸 と面 初白 水入 門

觸石 春香 老生 枕上 衞家 曉月 老定 中

山室 みの めさひ 一なる こしこ そあは

山 一はあゆ そらひひ さほさうり けり

人めと ちまもり せぬと おとく

田家

花映 緑以 袖子 榴ま ぎ様 赤鹿 影

もも 一久 逢之 竹枝 野馬 了體 休

野柳 井内 桑葉 露山 睡甲 日楯 花

着衣 村岡 笠重 又長 涼涼 月持 衣

くらり 田と 人 くらり くらり くらり

くらり くらり くらり くらり くらり

町とききはうるといつくたにいあへ
あえうもあこいさうりちりきり
まゆふしとさうりちりちりちり
いかにあそとあさうをのり
貫之
敏行

降家

日月好因三徑和揚宜他あやま
の福波身教あふ子孫也他海橋人
は邊方東是いん中者澄法若下流
あつたはたふる者あま着柳るあま
同
菅三四

青塚寺蓮華庵お色庵浪分社
さかんやとわら屋とくふわらう
つららあまふらむ人いり
直轄
伊勢

山寺

子標下叢峯ささ葉舟中あつ身
更無作揚苗之暇但有泉聲年洗我
不改朝天之便他取車とあま
園水之橋心為あま金
野相公
源六郎

第馬來肯出恩風標之可歎
在僧徒交脚見世俗之皆
人如鳥海身雲出地是終門終之登
三子世家眼前費十二因緣心裏空
衆起西洗舌何憂葉為風吹逐相林
山てつりあひのり終心息
ふもくれぬとくそとひ
ふのりしとくそとひ
花山院

佛事

智者大師

月隱室山考野草扇吟之風息
太老考初樹費之
於以人う生世俗文字末狂言終
終之撰翻為當來を讚作
乘因轉法輪之海
百千萬劫業提標十三子西地地

十有佛也之中以西方為望
九品蓮臺之間雖下亦在
雖十惡考狂了擬甚也疾風
披重雲方隆一人念考也感念
哈之巨海之納消露
昔切利夫之安居九十日刻
赤梅檀之檀香之香入之酸梅酒
之域及三子子治之麻衣全礼也
浪洗多消報竹馬向之願雨
打易破厨芥鷄之長志
念極樂之考一夜山月正者先
旬曲之云三初烟花欲落
五經卷之思維管奏神歌傳代結經人
眼蓮堂卷之清涼狀四月長安寺又天

保胤

後中上皇

江國權

保胤

龍齊名

以佛神通事約教經信祇劫欲約宗
曰凍貞未竟也皆曰松相捨也善也
二經末若于年役初時却存一業又
いづいとあつとむいしつあま
のりたさるりそふははつ
あつらへるあつたあつらへる
はとあつていふあつとありあつと
ころあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

村上衝製

空也上人

九條九相府

傳教大師

佛

茶花江霧雨之露初露江露をま
る煙嵐之し又既寺僧蹄
野寺坊僧由常月寺林扶乃窓破眼也
貴有母儀堂の蓮田中夫の月
室有師遠堂の德具又其也之實
明鏡花開江鏡照白雲不着下山茶

張讀

野原公

親を侍侍心奉り月と老高侍首判相
鶴閑趣刷子年若侍老眉老ハ字老
きくくくくくくくくくくくくくくく
こくくくくくくくくくくくくくくく
よの中ふふふのくくくくくくくくく
れりい乃乃くくくくくくくくくく
こくくはのさふれなりきくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく

困居

不獨記東都履道里有困居泰

適之使太令知白唐大和歳

理を安樂之育

官車一主梅甚之十二長之

際駈馳追行羅之三千暗老

出思不務深老之入く處愁猶

多く困意有月之時

鶴新用處勞人老之書美之居内在故人

人間榮耀固淺林下幽閑氣味
富貴自心長別業事後今日不言
蕙帶羞羅志拙簪於北山之水蘭
梳桂檝鼓舳於東海之東
都府楊終看瓦色視焉只徒誇
晦法出抱言俾日如宣於竹
白雲春初雨庭後多叢杖來霜
わや
とまらと勢
一
まふ

魁堂

風範白浪花子序乃狂者文字一
出空園之東望山卷半抄
躋翠巖之西顧家鄉
見天台山之高教軍平
長安城之遠樹百子
萬葉集

下深津陽浦直轄燿々如冰連天石路
正斜石宮瑞城二月餘花野外也順
老眼易迷殘齒是春情難聚多傷直轄
見わさしはあまさいさうくこころをい
やこそいさるれあしあありける兼

棧別

与君同志知仁者我初發一登白
新宅道途思挂石山之暮雲後江有公
後會期冬雨沾緇於鴈鴈之曉淚
若飛丹鳥競寸陰於十年之間順
今侯益能善言子於三百里後
楊岐路濟我之望之多年考之以
頃之入之送我竹日
万里東來未似身且生西望氣在襟
九枝楚岷唯約曉一葉舟死不約林音麻樂

野相公

秋の浮生期後に雲を散る夕の霞
にさひやふさふさうらりさうり
あふなうららんさひのさう
いの人とまらさう人そいけい
のらふうらうらよりあふあふは
きたらうらうらうらうらへへ

直務

元直

自用

幻極

不館省時風若面雲作霞とさ
ゆくまの明なまの境も不盡

詩評

妙と後妙と長風浦と雲は不
暁八長松に洞教泉咽と崖様比
夜衣極浦に似る山吹と皓

藤島雅

月夜

澄江都松風定出ば道満雨日晴看

齋相

海雲如面化は波岸柳秋風を雲情
羨は海雲を雲に望み山深る下

かろく〜
…
…
…
…
たからわつらりといそやうつげやん

庚申

年長每芳推甲子書之初志を庚申
己酉辛亥冬月庚申書成
いふに…
…
…
…
…

帝王
漢高三丈之劍... 後漢書文
…
…
…
…
…
…
…
…
…
…
…

幸逢堯舜身爲仁壽地播皇恩之

守皇自在長生殿不向孝業每

仁源秋澤海之科惠底執以定法

潤髮作神之序常開日砂長爲

霽之碩洋之滿耳

梁之青持春日之月漸爲國穆

新之西母之雲欲歸

帝政之庭風流未也歌也當國

爲之老山地也好文之世德化未也

光于美炎道之志我君也

榮石期之款三樂也

皇南造之述百皇

玉環同臨文圖見紅旗國志

刑殺浦杉營之志陳故若

鳥

後江相公

藤原わが

江相公

昔三品

たふふらうよさくやこのくらふあゆこもり
らりぬきまもさくらあきらめはさくらぬきり
ふしむせのくらはきとこのまむ
大鶴鶴天皇
小松天皇

親王付王孫

庫車秋筆貴公若初細馬家若
東平若若之雅書寧平漢宮廢老を
後之弟も桂陽録と文諱と乞奇
帝寵愛弟も

江都之好勤撫也七尺存風其悦
淮南之取神仙一旦乘雲らげ色
用奏己知為子道秋風悵望野湖
我王孝幼先の格油秋風一尺煙
花非是人間瓊樹杖頭身一花
世に地名人格再出平甚二行
いふふあやらんのとくは乃はさ
まうたれやまのらあいられ

善相 付執政

後漢書

孝父子妻不衣帛尊人以為大德

子孫公身犯命殺及獲錢多

百里奚大乞食於道穆公委政

寘威制牛於車下桓公任以國

孫公同室無國者傳說舟車借人

西京席門乃先陳丞相之舊宅

南山楚冢寧北若司能之也極

周之且老文王之子武王自

知其貴忠仁之白皇帝之祖

皇太后之父也推仁

傅氏教之尚雅風也於家

教法水行涇渭也漢初

春道及周初司能之家也

判史

その筆を御下は表を以て
精の合浦珠お似
隆るる名を
は一由句
たうま屋

詠史

於時其の度
名宿
依り
か

王昭君

然者
此
此

蘇東約月張らるる山清光
友日思世秘入事水くお題

策家の人まら書格梅未六種未法
雙塔上理美世行法深來時月紙

種神木道百才對圓鏡字梅得者遠
和心先存量量寫字好主お房高透家者卷

嬌美志強性長量將思馬好畫院志細

欲究今日新也無美法書先約書福徳等
あまうつ方そののうらみらあまうつ地よ
とと先のとうこ志りうとらりか良宗貞

梅女

賀蘭

妹水来の梅女佩を雪るる海集来志

筆出お園方事〜礼法筆筆突

舟中浪上一生〜歎気是因

和歌後調陰深月高橋高推念松

あつらん乃よ4つららるるよよをよよしく
あつらん乃よ4つららるるよよをよよしく
海人録

老人

若くは老はるるを兼ふと他は湖邊の
老眼子元き好む力なき長ら待て
再と情は絶るそわがき民分は移
お葉若くは一樹の美は木花結
後抽若くは一樹の美は木花結

少はるるを兼ふと他は湖邊の
若くは老はるるを兼ふと他は湖邊の
老眼子元き好む力なき長ら待て
再と情は絶るそわがき民分は移
お葉若くは一樹の美は木花結
後抽若くは一樹の美は木花結

海とつらきものさしをり新よびらひわてふつ時よそ
あふぬにまふよわらちらとれ
いほくうり身よはせまよの中
かこつらぬあちけい
躬爲
爲頼

交友

琴約酒友皆拋我霜月花時獨憶君
陽毛曲調多難和溪水交情老始知
芳年願我老眼今自存君之白頭
蕭金也舊之出古初純綿美代交
張僕村と重新才推為忘年之友
裴家文籍は因君之當礼部孤身我初
大さくもいりらとららりとある森
たさくもいりらとららりとある森
村上御製表
興風

懷舊

黃懷誰知我白頭獨憶君
將老年海一瀑故人交

長衣若先を後年我身何
秋風滿袂海象下故人多
生の妙を此に以て愛を直に
痛家事務な珍頭臨王手携
金谷研花之北花每春自白
南梅歌月之今月与秋期
王子若之舞仙は立祠中
源相規

之月羊老傳之早世初多
海松岨山と雲

海松岨山と雲

侍能良本も権欵を乞可棠勿
野美林

いみしき乃中一のま
村上御製

よの中よあま
人

本懐

志諾荆卿之威激復生豫子後漢書文

投身心為國使命此其概

范蠡收責句踐乘扁舟於太湖小同

答犯謝朓文之之遙巡於河上

祝其碩礫不親王國者不知文選

臻於不備習其弊也石祝上

邦者才知英雄之所

人向禍福思難以世之風化老不林亦

車前漢病馬強免祭上鷹馬者獲許渾

事無成身老研卿不生欲何歸

范蠡收責梓扁舟於地名謝安詩後江相公

功伏孤雲之志

昇殿乞名錄外之登也俗骨不直朝

心踏孝弟之雲尚書之天下之

皇運庸才吾以攀其基固之月
給聖教驅造三代の程沈恨同伯

寄秋の嘆ふを將主

言下暗生の骨尖筆中倫鋭刺の刃

載見一車の長松垂三使未為花

登三國確終行吾固伯夷創未我賢

あふらしてものころるよかあそ

の中へはともあつてもたあそ

あふらしてものころるよかあそ

冬又笑

綉佩曉緇斐圖歎悠波暮有一漢云

浅塘を園の空に道風光任意看

忽以江南諾老固若毅推子孫多

吏部尚書穢約中著純初出世傲文

橋正道

前中書五

橋侯草

讀入不知

蟬九

藤原高光

銀魚腰底祥雲漫海鶴夜回寐曉
花月一宮交為暇雲遊万里眼人窮
有和子丞相知之者乞當袖竹馬童
う 終 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

祝

嘉辰人 日 歡 在 極 乃 歲 子 林 未 央
也 生 殿 裏 春 秋 也 本 老 乃 亦 日 月 逢
わ の り か ん へ も せ し や ら り ぶ さ れ ゝ の
い ゝ か ー と あり 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
ま ー の せ と み ゝ 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
あ だ ん ー 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

仲筆

属 者 奉 主 家 世 祖 考 乃 葉 壽 乃 馨 香 香
乃 者 乃 之 宮 銘 君 身 是 主 家 之 親 色
更 承 和 氣 乃 長 乃 圓 乃 乃 亦 存 在
風 娘 圓 乃 香 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心
山笑見存何心

春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日
春風桃李花開日

夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情
夕夜夢花思情

雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴
雨初晴

流水空
流水空
流水空
流水空
流水空
流水空
流水空
流水空
流水空
流水空

空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳
空園楊柳

貞女
貞女
貞女
貞女
貞女
貞女
貞女
貞女
貞女
貞女

わが恋
わが恋
わが恋
わが恋
わが恋
わが恋
わが恋
わが恋
わが恋
わが恋

たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ
たのしみ

い
い
い
い
い
い
い
い
い
い

あり
あり
あり
あり
あり
あり
あり
あり
あり
あり

無
無
無
無
無
無
無
無
無
無

親
親
親
親
親
親
親
親
親
親

瑞午
瑞午
瑞午
瑞午
瑞午
瑞午
瑞午
瑞午
瑞午
瑞午

後江相公

後江相公

舟楫

素素性

羅維

白

多し身にお似歳と年人不同

生かぬ減稼多し免梅檀と松

樂友と琴来夫人程を又香の目

約多おれ終世海音為魚精刻糸

己親林川中親道善花愛露名

よの中とたふふくはびわさかり計

色中ハゆめうらうらうはくいと色

あつらふあふあふあふあふあふあ

と束のつねりとの屋らの中乃

白

奉旨篤款道舟と主日馬の漢帝

倚暖種衣と蹄内鶴髪

福のやうな素林と又見林園の香

毛髪飛海室に座王弘は古咲花あ

宋之間

後江相公あり

義孝少將

後江相公

浦拾法師

貫之

良僧正

謝觀

順

萬家月色は海を渡る
 霜鶴沙鷗は雪を舞う
 年々秋深き
 月夜に
 花の匂

和漢朗詠集巻三下

元禄二己巳 孟春吉日

須原茂兵衛判行

日本



名峰筆

名峰筆

